いまどきの歴史

一番新しい日本の一ページ

サバイバル

災害頻発の日本で生き残るためにも そのための知識と、普段の心構えを

この秋、大型で強い台風の直撃が続き、中越では地震が大きな被害をもたらした。京都においても「トカゲ」こと台風23号が直撃し、北部を中心に大きな被害を与えた。冠水した町並みの映像や、浸水したバスの屋根に上って救助を待つ人々の姿には目を疑った。バスの乗員は全員が無事に救出されたが、それには大きな理由があった。彼らはバスから降りず、バスの窓を備え付けのハンマーで割り、全員が屋根に上った。次にカーテンをはさみで切って結び、命綱をつくり、全員でそれを握るというサバイバルのエキスパートばりの適切な行動をとり続けた。さらには救助を待つ間、声をかけあったり歌ったりして気持ちを落ち着かせていた。幸運にも乗客の中に看護士がいたので「腹式呼吸して体温を下げないように」などとのアドバイスもあったとか。災害に見舞われた時、どうしても人はパニックを起こす。でも、そんな時に冷静に判断し、正しい行動に移れるかが明暗を分ける。「備えあれば憂いなし」というが、最も大切な備えというのはやはり「心構え」ではないだろうか。

新施設

'06年、廃校になった旧小学校を利用し 京都市にマンガミュージアムが誕生

全国でテーマミュージアムがこのところ話題になっているが、2006年秋、京都に国際マンガミュージアムがオープンする。構想を立ち上げたのは日本で初めてマンガ学科を開設した京都精華大学と京都市。施設の予定地が中京区の元龍池小学校というところも京都らしい発想で魅力的だ。収蔵・展示内容は世界各国の単行本や雑誌など20万点にものぼるとか。マンガは今やジャパニメーションとともに世界で高く評価されている文化。平安時代、マンガの原形とも言える「鳥獣戯画」を生み出した京都にマンガミュージアムができるのは実に誇らしい。惜しくらむは京都発のマンガがまだまだ力不足という点。他府県の大学や専門学校でマンガコースが増えつつある今、ひと足早くマンガ教育に取り組み始めたアドバンテージを活かして、教育機関には優れたマンガ作家の育成にさらに尽力して欲しいところ。京都からも後世に名を残すマンガ作家が生まれるのを待つばかりである。

新名所

思い出づくりよりも進学・就職の準備 大学や企業を訪問する今どきの修学旅行

首都圏を訪れる中高生の修学旅行では今、レジャー施設や繁華街を訪れる一方で、大学を訪問するコースが増えている。訪問を受け入れている大学は早大や中央大など。中には修学旅行の日程に合わせて模擬授業や進学説明会を行っている大学もある。高校側もレジャー色を廃して「企業・研究所・大学訪問研修旅行」に切り替え、東大、京大、筑波大などを訪問するところもあるようだ。

今や少子化の時代。2007年には大学・短大の志願者数が入学者数と同じになると言われている。大学は受験生の確保が死活問題だし、中学・高校側は修学旅行を利用して進学について真剣に考えさせたいのだろう。そういや本誌編集部にも修学旅行中の中学生の見学を受け入れたことがある。修学旅行が進学・就職のためのものになるのは味気ない気もするが、開かれた大学、開かれた企業がこれから増え、中高生が将来について考える機会を提供するのも現実的な方針として評価できる。

文◎大塚　祐希

京都で活動するライター集団・大塚祐希事務所CEO。昨年のイスラエル滞在以来、異文化を紹介するTEXTREAM PROJECTを始動。20カ国に及ぶ人々とネットワークを構築し、ボーダレスな活躍を目論む。
HP●http://www1.ocn.ne.jp/~tsukapon/

イラスト◎両口　和史

1967年京都市生まれ。京都精華大学美術学部卒業。北山のオフィスにて様々なキャラクターやイラスト制作をおこなうユニット「キャトル・イラストレーション」のチーフ。猫、フランス車、家具、雑貨、レコード、本、おもちゃ、平日の公園。それらがイラストを構成するエッセンスである。HP●http://www.d1.dion.ne.jp/~ryoguchi